

こんにちは♪ ひさしぶり♪ みんな元気にしてた？ あっという間に夏休みは終わってしまいましたね。さあ、新シーズン。まだまだ暑いですが、シャキッとしましょう！

さて今号では、**芥川賞と直木賞の受賞作**をまず紹介します！

芥川賞 & 直木賞 受賞作！

『おいしいごはんが食べられますように』 高瀬 隼子^{じゆんこ}

芥川賞！「心をざわつかせる、仕事+食べもの+恋愛小説」。
ごはんを食べなきゃいけないのが面倒で、一日三食カップ麺を食べて健康^{にだに}に生きていけるのなら、カップ麺だけでいいと思っている二谷。頭痛持ちで、苦手なことが多くて、しんどくなると休んでしまったり、早く帰^{あしかわ}ってしまったりしているのに、それを周りから許されている芦川。そのとぼ^{おしお}ちりを受けて芦川のぶんまで仕事をしなくてはならない同性の押尾は、そんな芦川のことを苦手だと思っている。「二谷さん、わたしと一緒に、芦川さんにいじわるをしませんか」。手の込んだ手料理を芦川はつくってくれるのに、彼女の眠ったあとで二谷はカップ麺を食べたりする。片頭痛がひどくて会社を早退したのに、マフィンをつくって翌日に配る芦川。「みんな、喜んでくれてよかった」。それからたびたび手づくりのスイーツを会社のみんなに配るようになるが、二谷はそれが気に食わない。誰もいなくなった会社で、食わずに残しておいたスイーツをぐしゃぐしゃに…。

『夜に星を放つ』 窪 美澄

直木賞！ 読み直してみました。改めて紹介を。「もう何も失いたくない。でもまた人と関わりたいと思った」。コロナ禍で巣ごもり生活を強いられ心が弱っていたとき、朝食に食べたアボガドの種を植えたら育つんじゃないかとふと私は思う。「弓ちゃんはコロナで世界が変わってしまったことも知らずに死んだ」。一卵性双生児の弓ちゃんを脳内出血で亡くしてから、私は婚活アプリにハマるようになった。アプリを通じて出会った麻生さんと、自粛期間が明けた夏休みに海岸へと行った。弓ちゃんのことを話すと、彼は冬の星座の双子座を探してくれ、冬になって見つけたら教えてくれると言った…。星にまつわる短編集。

『腹を割ったら血が出るだけさ』 住野よる

「人でも物でも、小説でも、自分がこうありたいって思えることを示してくれる存在に出会えたっていうのは、すごい幸せだと思う」。『キミスイ』の住野よるの挑戦作！こんなに厄介なヒロインはかつていたでしょうか？「みんなの愛する私は作りものでした」。タイトルがいいですね！腹を割って話そうとかよく言うけれど、腹を割ったら出るのは血だけだという諦め。人から羨まれるような恵まれた存在でありながら、「愛されたい」という思いが強すぎて、無意識に人から愛されるような行動を取ってしまっは（あらゆる行動が支配され制限されている）、そのたびにそんな自分を嫌悪して死にたくなってしまう女子高生の茜寧。『少女のマーチ』という小説だけが本当の彼女をわかってくれると思ひ、たったひとつの救いだと思っていた。孤独な茜寧のまえに、『少女のマーチ』の登場人物である「あい」にそっくりな人物が現れる。その物語の中の人物、ヒロインの友人の少女そのまんまのその人は、女装した男性だった…。「茜寧は届かないのを知りながら、本当は、ずっと叫んでいた。助けてほしいと。見つけてほしい、と」。上辺の自分。本当の自分。

☆『汝、星のごとく』 凧良ゆう

「登場人物だけでなく、読む人の人生にも踏み込まざるを得ないくらい本気の恋愛小説が増えてほしいですし、私自身、これからも書いていきたいと思ひます」。本屋大賞を受賞し、映画化もされた『流浪の月』の凧良さんの最新作は、本気の恋愛小説！タイトルは、佐藤春夫が宵の明星を詠った短詩「夕づつを見て」の一節から。舞台は瀬戸内の小さな島。愛人のもとに父親が去って行ってしまった暁美。生まれてすぐに父親を亡くし、一時たりともに男なしでは生きられない母親に育てられた権。「普通ではない」親に振り回され、苦しんできた二人は高3で出会い、同じ孤独を分け合える恋人になった。二人はともに島を出ることを望んでいたが、権が在学中に雑誌連載を決めマンガ家としての将来を切り開いて東京へ行こうとする一方で、暁美は父親の愛人の家に火をつけようとするところまで追い詰められてしまった母親を見捨てることができず、島に残ることになった。東京で夢を叶えてプロのマンガ家になり、作品がヒットしてちやほやされる権。両親が離婚し、経済的な不安から高卒で地元の旧態依然の会社に就職した暁美。対等だったはずの関係に生じた不均衡。暁美は、権に女の影を見、自分に退屈していることに気づく。自分に価値を見いだせず、侮られる程度でしかない自分が悔しい。本当に相手のことだけを愛していた二人なのに、すれ違ってしまう…。

『その本は』 又吉直樹 ヨシタケシンスケ

なんとあのヨシタケシンスケと又吉がコラボ！ 本好きの二人がつくった「本についての本」です。二人が本の好きな王様から、世界中をまわって「めずらしい本」についての話を集めるように頼まれ、交代で王様に「その本は…」と話すという設定。「その本は、鉄よりかたいときと、豆腐よりやわらかいときがある。ふざけて友達のを叩いただけで殺人事件になったり、力強くひらいて読むとくずれたりするから難しい」というように。又吉パートとヨシタケパートに分かれています。ほとんどは笑えるのですが、まじめなことも書かれています。古書店に並んでいるボロボロの本。それは、持ち主に何度も何度も繰り返し読まれた本で、とても幸せで、書かれている物語とは別のもうひとつの物語を持っているということ。一人のために書かれた本がその一人に届くという奇跡もあるが、世界には「届かなかった」本が無数にある。ボトルに手紙を入れて海に流すようなことを、人間は本という形に託してずっと作り続けてきた。ほんのわずかな可能性を信じて。

『ルポ 誰が国語力を殺すのか』 石井光太

「きも」「死ね」独り言のようにつぶやかれた、あるいはネガティブな感情をそのまま吐き捨てたかのようなネット上の言葉。それは、相手の表情を見て、相手の思いを考えて、発せられた対面のコミュニケーションの言葉とはまったく違うものです。でも、もしそれしか知らず、それが日本語なのだと思っているひとがいたのなら…。この本の著者の石井さんは、小学校の国語の授業の見学をして、戦慄すべき体験をします。教科書の定番である『ごんぎつね』。それを読んで話し合う生徒たちがとんでもない「誤読」をしていたのです。きつねのごんがいたずらで逃がしてしまったうなぎや魚は、兵十が病気の母親に食べさせようとしていたものだったのだと、兵十の母親の葬儀で知らされる場面。葬儀の準備をする女たちがかまどで火をたいて、「大きななべの中では、何かぐずぐずにえていました」。その「何か」を兵十の母親の死体だと思い、それを煮ているのだと何人もの生徒が大まじめに答えていたのです。何かを感じ取ったり、想像したりする読解力以前の基礎的な能力が欠けている…。石井さんは、生活困窮、児童虐待、少年事件などさまざまな問題を本のテーマにしていますが、その取材で出会った少年たちが自分を語る言葉を持っていなかったこととの類似を感じます。子どもたちが社会で生きていくための「国語力」が失われている…。殺したのは家庭か、学校か、ネットか。高校で学ぶ国語が変わったいまだからこそ、読んで考えねばならない一冊！

『さかなクンの^{ギョ}一魚一会 まいにち夢中な人生！』 さかなクン

ギョギョ！「好きに勝るものはなし」という言葉を彼ほど体現している人はいない、さかなクンをなんとのが演じて映画化！好きなことに脇目もふらずに夢中になるのは、2・3歳のころから。泥だんごを作るのに夢中になって、お砂場の縁ぜんぶに泥団子を並べるまで家に帰らない。112個も一日で作ってしまいます。始めから魚一筋だったわけではなく、始めは「はたらくくるま」、その次は妖怪。小2のころまではそれらの絵ばかり描いていたのですが、友だちの描いた「タコ」の絵に衝撃を受けます。こんなおかしなかたちのものが現実にいるなんて！ 図鑑でタコを調べたり、魚屋や水族館に見に行ったり、海にタコを取りに行ったりしているうちに、ついに魚への関心が目覚めるのです！ 授業中も魚ばかり描いている彼は問題児でしたが、お母さんは「このままでいいんです」とさかなクンを肯定してくれるのでした。吹奏楽部を“水槽学”部だと勘違いして入部してしまった中学時代。「TVチャンピオン」の全国魚通選手権でみごと優勝した高校時代。勉強がまったくできなかつたので大学進学を諦めて、水産生物を学ぶことのできる専門学校に行ったけれど、定員に達しなくて水産生物科が廃止に。水族館、熱帯魚屋、お寿司屋。どれも自分の理想には当てはまらず辞めてしまいました。でも、彼は自分の好きなことで道を開いていきます。お寿司屋さんのお魚壁画を描いたことで話題になり、TV出演が決まるのです。それからの活躍は皆さんもご存知の通り。ついには、東京海洋大学の客員教授に任命されます。それは、小学生の卒業文集で書いた夢だったのでした…。キミも夢中になって何かを追いかけてごらん。

『答えられないと叱られる!? チコちゃんの素朴なギモン365』

「ポーっと生きてんじゃねーよ！」いまさらチコちゃんと言わなかれ！ この本は、「チコちゃんに叱られる！」で過去に取り上げられた365の疑問を詰め込んだ一冊なのですが、これがなかなか答えられないものばかりなのです。たとえば、「シャツのボタンが男女で逆に付いているのはなぜ？」これは、男性は自分で着やすいように右手側。女性は、上流階級の貴婦人が使用人に着せてもらいやすいようにその反対側になったのだそうです。へえ。そのほかにも、運動会や紅白歌合戦などで赤組と白組に別れるのは、平氏が赤の旗、源氏が白の旗を掲げて敵味方をわかりやすくしたのが由来。プリンのカラメルが余計だと思っていたら、あれはプリンをキレイに取り出すためのものなのか、などなど。大人になるとあっという間に1年が過ぎるのは、子どものころに比べて「ときめき」が少ないからだそうですよ。